Inter BEE REPORT EXPERIENCE Key Person Intervew

9社がフライングにてエントリー 多くの人が待った ラインアレイ試聴会の舞台裏

テキスト：半澤公一

前号に続き、昨年11月20日に開催された国際放送機器展「Inter BEE 2014」での記念イベント、「ラインアレイスピーカー体験デモ」の模様をお届けする。今回はこの試聴会で主軸となった運営陣のインタビューをまとめてみたい。

1965年の第1回開催から数え、昨年で第50回という節目を迎えた「Inter BEE 2014」。過去最多となる出展数と入場者数で記録を塗り替えて盛況のうちに幕を閉じたが、なかでも注目を集めたイベントのひとつがこの試聴会。スモールからラージシステムまで、現代の著名ブランド9社が一堂に会し、ひとつの会場に居ながらにしてすべてを体験できるといった、貴重でありまたこれまで過去に例を見ない催しであった。さらにすべてのスピーカーがフライングされるというアプローチが大きな特徴。これにより観客はシステムが持つ性能を活かしきった本来のサウンドを余すところなく享受でき、まさに望むところを突く的を射た秀逸な企画といえよう。

その仕掛け人となったのは「INTER BEE EXPERIENCE」事務局プロデューサーとしてすべてを取り仕切った高橋嘉樹氏。そしてチーフとして現場を束ねたのが「sound design.」を率いる大内健司氏である。大内氏はこれまで放送関連やライブなど多くの現場で活躍、豊富なキャリアと高いスキルを併せ持つ適役中の適役。早速このお二人に詳細をうかがっていこう。

Inter BEE 2014が果たした役割

プロサウンド（以下、PS）　まず試聴会の様子をうかがう前に、「Inter BEE 2014」のことについて少し教えてください。今回の開催は大きな成功といえる成果があったようですね。

高橋　そうですね。ご承知かと思うのですが今年は50回目ということで、その目玉のひとつとして今回のイベントを催していますが、その効果もあってかおかげさまで過去最高の入場者数を記録しました。

PS　この「Inter BEE」という催しですが、そもそもどういったものか。変遷やその動きというところでは。

高橋　運営をしていますのが「一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会」で主催が「一般社団法人電子情報技術産業協会」になるのですが、第1回の開催は1965年。放送局がこれから隆盛していくという時期で、それに合わせ放送機器や関連機材の展示会として立ち上がったと聞いております。ベースとしてはやはり放送関連の機材ですね。ただその流れのなかで、当然現場で使われる照明や音響、そして映像といったメディアが全体として拡大を見せ、さらに近年のネット系通信ですね。そうしたメディアビジネス全体のプロフェッショナル向け展示会に現在は発展しています。

PS　「Inter BEE」のような大規模展示会の役割にはどういったものがあるのでしょうか。世界中でも著名なものが毎年行なわれていますね。

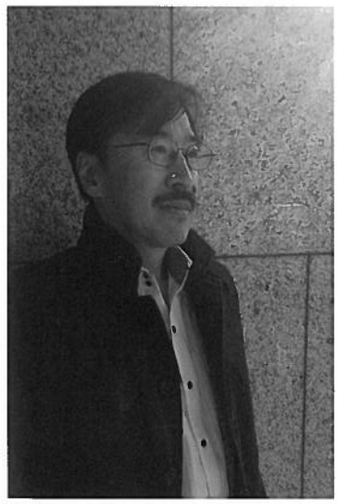
高橋　「Inter BEE」に近い展示会としては米国のラスベガスで行なわれる「NAB Show」というものがありますが、基本的にトレードフェアですね。買いたい側と売りたい側が商品を見ながらそこでビジネスのきっかけを作ると。これは展示会の基本中の基本です。同時に年に一度業界の方々がそこで出会うというのがとても重要で、普段は会えない立場の方あるいは久しぶりに顔を合わせるなどし、そこでさまざまな話も当然出てきます。そうすることでまた新しい仕事が生まれるきっかけになる場でもあるわけです。ビジネスという側面とはまた別に、コミュニケーションの場として使っていただくのが有意義ではないかと考えています。

PS　2014年の開催が第50回というひとつの節目だったのですが、記念イベントにおけるテーマや見どころはどこにあったのでしょうか。

高橋　今回はいろいろなものが同時多発的に行なわれ、さまざまなテーマが設けられたのですが、大内さんと一緒に行なったイベントの大きなキーワードは「EXPERIENCE」という命名からおわかりのように「体験」でした。展示会の特質として機材なり技術なりをお目にかけるのですが、会場で見ていただくだけではやはり充分でない部分があります。出展各社はブースで体験型のプレゼンテーションやデモを工夫されるのですが、そこには展示会場なりの制約もあるわけでして、それをどうにか第50回の開催を契機に「体験」という形で来場者にお伝えできないものか。それを実現したものなのです。また「Inter BEE」全体としましては、ご存知の通りメディアビジネスは流れが速いですから、その流れをあと押ししながらも先頭を走り、次につなげていくということがテーマと言いますか大きな考え方となりますね。

PS　出展数も過去最多を記録したようですね。一時期、世相を反映してか元気がないと感じた年もあったように記憶していますが、盛り返したと見てよろしいでしょうか。

高橋　ご承知のように、これまでリーマンショックや震災といったようにこの数年苦しい時代を経てはいますが、放送の世界では4Kの本格開始やオリンピックなど、メディアビジネスが全体的に元気にならなければといった、業界の環境といいますか、状況もひとつの要因かと思います。



高橋嘉樹氏

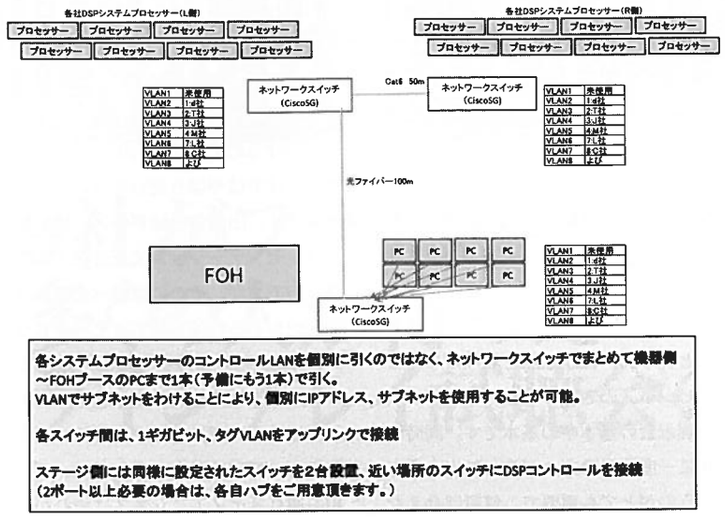
大内健司氏

充分な経験値が認められサウンドデザイナーに抜擢

PS　では大内さんにお話をうかがっていきたいと思います。今回はメーカー主導で行なわれるような試聴会ではなく「Inter BEE」というある種特殊な場でのイベントということで大事なポジションを務められています。ご担当なさることになった経緯を聞かせてください。

大内　今回の制作プロデューサーであ

図1　プロセッサーコントロール用ネットワーク



る「CCN,LLC」社の安藤嘉康氏からお声がけをいただきました。以前にモーターショーなどのイベントでご一緒し、そのご縁だったのですが、話が進むうち内容や規模といったイベントの全貌が見えてきまして、これは重要な役目だと。私に務まるのかなといった不安も正直なところありました。

高橋　補足しておきますと、安藤氏から今回は「サウンドデザイナー」がキーマンとなる、ついては良い方を。ということで大内さんに白羽の矢が立ったという訳です。

PS　大内さんのプロフィールを簡単にうかがっておきたいのですが、これまでどういったご活躍を。

大内　現在「sound design.」を主宰しています。基本的にはこれまで音楽系を主にやってきましたが、音に関わることでは特殊なことにもこだわらず過ごしてきましたね。

PS　現在、主だったところではどういったお仕事を。レギュラーなどはいかがでしょうか。

大内　2004年から約10年、テレビ朝日の番組で「ミュージックステーション」のオペレーターを担当しています。

PS　それは放送ミックスを手がけていらっしゃる？

大内　いえ、PAセクションのモニターですね。

PS　それは技術が求められる難しい現場ですね。私も少し経験があるのですが、放送音声の邪魔にならず、アーティストにも満足してもらうには、スイートスポットをうまくコントロールする術が必要ですね。

大内　最初、紹介をいただいてフロアとして始めたのが1998年くらいでしょうか。その後オペレーターとしてやってみないかと。最初は焦りましたね、放送ですので特にハウリングなどはもってのほか。まして生ですから。でも毎週のことですし、今では緊張感があって良いなと思っています。現在はイヤモニが出てきたので助かっている部分も確かにありますね。

PS　これまで携わられたなかで印象に残っている現場などがあれば教えてください。

大内　海外の方ですとシンディ・ローパーさんでしょうか。ビッグネームなのに気さくに話をして下さった記憶があります。日本ではアーティストとの距離は遠い存在のような感じをぬぐえないのですが、海外アーティストはエンジニアとして会話をしないと成立しないところがあります。片言の英語であっても積極的に話していただけますね。

PS　大内さんご自身は現場へ向かうにあたり、どういったことを大切にお考えですか。

大内　アーティストさんの表現を尊重すること、それはもちろん大事にしていますが、オーディエンスの反応をとても気にしています。特に年齢層に幅がある場合など、柔らかというか耳に優しいサウンドづくりを心がけます。実際そうしたアーティストも現在担当していますので、子供さんが喜んで帰ってくれないと成立しない。以前に耳を塞がれたことがありまして、それで気付きました。やはり満足して帰って下さるからこそ次につながっていくのだと。

PS　チケットを買っていただく限りはサウンドマンとしてその価値を提供すべきと。

大内　ホールでの現場が多いのですが、終演後客席が明るくなってからしばらくバラさずにお客さんの様子を見ることにしています。

笑顔であれば、ああ良かったと思うのですが足早にお帰りになると気持ち良くなかったのかなと。そうした反応には怠らずに注意を向けています。音づくりといった点では担当するジャンルなりの求められるところを重要視し、常に引き出しを多く持っておくことが大切かと考えています。

多くのオファーがついに実現

PS　では記念イベント、「ラインアレイスピーカー体験デモ」についてうかがっていきます。まずは何故試聴会だったのでしょうか。

高橋　ご存知かと思うのですが、日本で吊り下げ方式で行なう試聴会はなかったかと思います。一方でドイツのフランクフルト「Prolight + Sound」などでは実施されているようで、「ぜひ日本でも」といった声が以前から各メーカー、代理店、またPAカンパニーの方々からあったのです。ただ実現するにはさまざまな困難が想定され、着手できなかったのが現実です。当然その声は「Inter BEE」にも届いていたと聞いています。そこで第50回というきっかけをうまく使い、先ほど申し上げた「体験」というキーワードの象徴として、制限があるブースではなく音も大きく出しながら、かつ吊り下げる。実際の使用環境に近い形で挑戦してみようと。イベントホールという空間がありますし、そこを活用して、やはり本物を体験していただく。それに尽きるかと思います。

PS　難題が想定されながらもそうした思いで走り出された訳ですが、現場部隊としては大内さんを筆頭にチーム構成がなされ、現在主流のスピーカーシステムが9社、一堂に会しています。すべてがラインアレイモデルとなっていますが、大内さんはラインアレイの存在に対してどういった印象をお持ちでしょうか？

大内　映像と違って音は目に見えないですけれども、ポイントソースからは大きく変わりました。単に拡声するだけでなく、届けるべきところにしっかり届きますしエリア制御が秀逸です。特に新しいモデルでは、必要のないところを遮断できる技術が搭載されていますね。

PS　今回の参加モデルですと「Martin Audio」や「EAW」などがそうでした。

大内　将来的にはそうした方向性に向くのかなと感じているところです。

PS　高橋さん、先ほどうかがった次世代を睨んで、という切り口ですとやはり試聴モデルはラインアレイでといった理由があったのでしょうか。

高橋　そうですね。やるのであればということがまずありきです。「Inter BEE」もこうした展示会は国内唯一ですし、やはり音響の世界で最高峰のものでその場を作りたい考えがありました。そうした解答のひとつとしてとらえていただければと思います。

カバーエリアと音圧がひとつのポイント

PS　さて概要をうかがったところで次に、大内さんは具体的にどういった動きをなされたのですか。

大内　サウンドデザインですね。現場のオペレーションや音響系のディレクションに至るまで全体を見ています。例えば9社のスピーカーをどう吊るか、また会場設計やプログラムの検討などの準備から進めました。

PS　今回のエントリーに際して参加の条件などはいかがでしょうか。

大内　一応、規定と言っても簡単なものなのですが、各社共通の立場で参加いただかなくてはいけないということで、大きなところでは重畳の問題がありました。

各社やはりばらつきがありまして、勝手にというわけには参りませんので上限を決め、その範囲内でということをひとつの規定としています。

またレギュレーションとして、例えば平均値のような音圧設定を決めようと進みかけたのですが、僕としては各社の色を出していただくためにそこは超えても個性を活かしたい。それぞれの良さを発揮できるところでと。その部分を規制してしまったら、同じ音圧で音色が少し違うくらいで面白味がない。「小さくても出ますよ」と。それもひとつのセールスポイントであれば、ぜひやっていただきたいと強く申し出ました。

高橋　9社横並びでという公平性を前提にした展示会、試聴会というところの条件。当然それは揃えなきゃいけない立場と、いま大内さんがおっしゃった各スピーカーの良いところを引き出したいところ。そこはジレンマというか闘いですね。音圧という項目はやはり大きなポイントになってきます。

PS　引かれたラインということでは他に。

大内　リスニングポイントですね。それをあらかじめ設定し、そこをねらっていただくと。遠方や横方向へのサービスといった特徴も各社あるかと思うのですがその部分は設定をしています。他に共通音源以外はコンソールのフェーダーもご自由にどうぞ、といったところです。

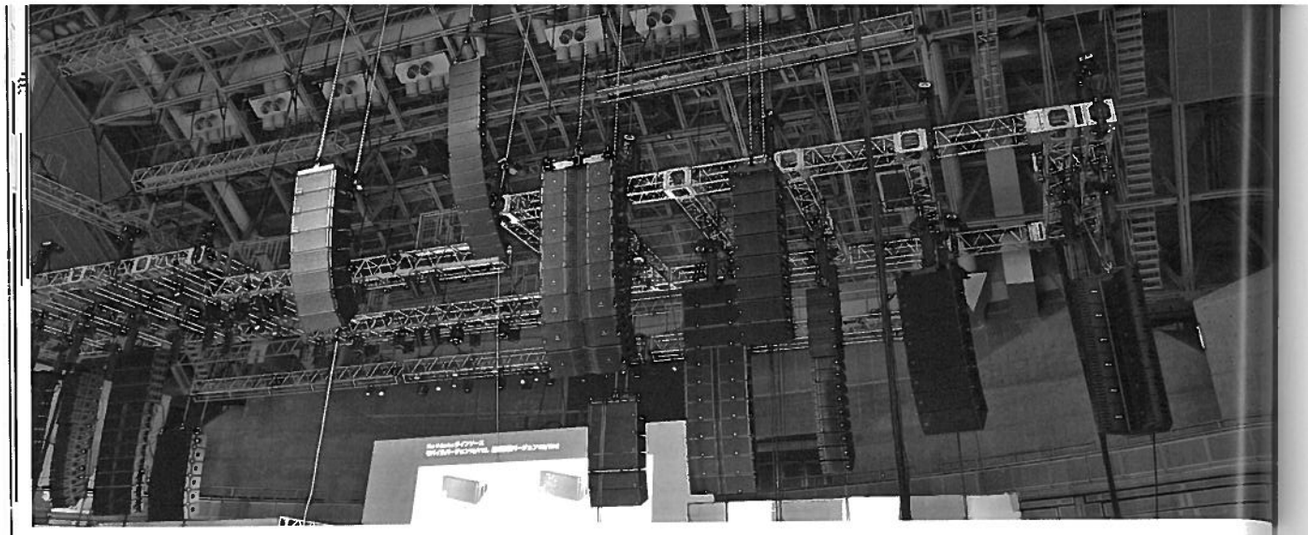
高橋　そういった意味では基本的に自由にやっていただきたい思いは事務局側としても気持ちがありました。ただ共通音源だけについては公平性を保たせていただくと。あとはぜひ自由に、それがプログラム上でのポイントです。

PS　ハードウエア面ですが、例えばスピーカーのシステムアップや調整、チューニングといったところは事務局側から何か指示はなされたのですか。

大内　そのプロセスに関しては、PCを持ち込まれている中身について触れてはいません。ただ制御信号についての通信系、またコンソールからのデジタル伝送についてはこちら側で構築しています。

図2　OUTPUT＆コントロールVLAN振り分け表(2014.11.20/第1部)

順番	メーカー	スピーカー	プロセッサーINPUT	Rio3224D	PCコントロールLAN	
1	d&b audiotechnik	Y series	AES/EBU	AES1	VLAN3	
2	TOA	HX-7	アナログ	Rio1/2	VLAN4	
3	JBL	VTX series	アナログ	Rio3/4	VLAN5	
4	MeyerSound	MINA	アナログ	Rio5/6	VLAN6	
5	EAW	AnyaSystem	DANTE/AES(Sub)	DANTE/AES2	DANTE(GigaCore)	
6	MAETIN AUDIO	MLA	AES/EBU	AES3	自社Wi-Fi	
7	NEXO	STM series	DANTE	DANTE	DANTE(GigaCore)	
8	L-ACOUSTICS	K2 System	AES/EBU	AES4	VLAN7	
9	CODA	LA12	アナログ	Rio7/8	VLAN8	



9ブランドのラインアレイ・スピーカーがフライングで一堂に会する様はまさに圧巻

PS　ではさまざま音を出していく上で、大内さん側からシステム側への指示はないということで、逆にコンソール側でベーシックを作ったような恰好でしょうか。

大内　コンソールにシーンを9社分作りまして、それをタイミングごとに呼び込むといった流れですね。やはりフラットにしているということが条件ですので、あとの色づけは参加者側でプロセッサーなどの制御や工夫となります。特に指示がない限り、リハーサルから触れない方針でした。

PS　ミックスを行なうといった観点からは、なかなか難しいところではありますね。コンソールからの伝送はデジタルとのことですが。

大内　今回は「ヤマハ」さんにご協力いただきハウス、モニターともに「CL5」を使っています。

ステージボックスとして「Rio3224-D」および「Ri8-D」を用意。音声信号はこれらを使い、制御信号についてはネットワークスイッチを介し「VLAN」を切り棲み分けしています。アンプ側に置いた「Rio3224-D」から各社のプロセッサーまでは「AES/EBU」やアナログなどさまざまとなっています。これらネットワークシステムの構築は精通した技術を持つ「ティースペック」の橋本敏邦氏にお願いをしています。

立ちはだかる重量の壁

PS　今回のイベントでご苦労された部分ということでは。

大内　やはり重量に対する解決ですね。

高橋　さまざまな方法を検討したのですが、最終的に天井の吊り点からトラスを組み、そこからチェーンモーターを使うオーソドックスな方法を採っています。ただその計画時点では参加社数が見えておらず、出揃ったところで各社から要望が出てきます。当然ラージは重いですし、全体重量の配分と荷重計算が最も大きなポイントでした。正直もうぎりぎりなところでしたね。

PS　ラージとスモールがあり、当然ステレオですからLとRがありますね。

大内　前側にスモールを並べ、奥にラージといった配置ですが、スモールが終わればそれらを飛ばすのですが、そのプログラムには時間をかけ、何十回とシミュレーションを繰り返しています。耐荷重の制限で幾つも同時に動かせないのです。とにかく安全面を最優先に取り組んでいます。

高橋　事故が起これば全てがダメになりますからね。大きな課題でした。また、搬入が前日のみでリハーサルも必要でした。第2部のパーティーも含め、48時間で2つのイベントの設置から撤去までと、タイムテーブル構成も苦労をした部分です。

PS　さて本番が始まり、私も全編参加しておりまして、素晴らしいパフォーマンスで試聴会は好評のうち無事に終了したのですが、デザイナーとしての立場から大内さん、今回達成度の点ではいかがだったでしょうか。

大内　90%くらいは成功といって良いかと思います。残り10%は本番で見えてきた部分です。

例えばお客さんの動きが思っていたよりも多く、エンジニアの方々があちらこちらへ移動しながら聴かれていましたし、これはリハーサル時に気付いたのですが、アンプの直近まで近づけるようチェーン柵の移動を行なっています。始まってみてわかったことがいくつかありましたね。

PS　イベントは見事成功と言えるかと思うのですが、その要因とは何だとお考えですか。

高橋　スムースに事故無く終えられたのは、これはもうスタッフの頑張り。そして参加された9社の各メーカー、代理店の方々の協力体制のおかげです。これらが無ければ実現できなかったでしょう。あと一点、これは事前に読めていなかったのですが、何といっても多くの方が会場に足を運んでくださったこと。期待感を持っていただけたのかなと。それはとても大きな要因ですね。

PS　今回ラインアレイを使った初めての大規模イベントでしたが、新しい発見や手応えといったところでは？

高橋　まずあれだけの数のお客さんが来ていただけたことに加え、展示会の通例ですと、ひとところに留まる滞留時間は意外と短いのです。ところが朝から複数社を聴かれ会場に長く留まっていただけた。その点が最も嬉しかったですね。

PS　大内さんはいかがでしょうか。

大内　スピーカーシステムについてはどの機種も高いクオリティで新しい世代に突入したことを体感しています。また試聴が終わったシステムを降ろし、ケーブルを抜き取るといった撤収の行程も見ていただきたかった。「近くで見るとコンパクトだね」といった声が聞こえてくるのです。そうした部分も体験いただけました。

PS　音だけでなく運用の部分ですね。仮に自社で導入すると、それらは自分達の仕事になるわけですから。

大内　そうしたバックステージを見ていただくこともひとつのポイントで、例えばコンパクトでバラシが速くできるといった要素は制作全体にも関わってくることなので、わずかながらでもお役に立てたのかなと思っています。

PS　単に音を聴くだけでなく、さまざまな動きも併せ見ながら同時に体験ができる、まさに「EXPERIENCE」と言うに相応しい素晴らしいイベントでした。今日は長い時間、ありがとうございました。

橋本敏邦氏が語る 複雑なネットワーク構築 その成功の鍵とは

PS　デザイナーを務められた大内さんとは以前からご一緒されるお仲間とのこと。今回の依頼はどのような経緯だったのでしょうか。

橋本　使用されるコンソールと周辺機器が「ヤマハ CL5」、「Rio3324-D」および「Ri8-D」ということで「Dante」での接続は決まっていましたが、実際の伝送構築をどうすれば最善か、比較試聴を可能にするにはと相談を受けました。伝送形態については各社さんまちまちで、すべてアナログという考えもあったのですが、大内さんから「せっかくなったのだから最新鋭の規格を使い、それぞれが最高の状態を引き出したい」との意向で、みなさんが希望される方法のリクエストを受けて進めるといった形となりました。

PS　橋本さんはデジタル関連、ことにネットワークオーディオについては明るいと各方面から声が届いています。

橋本　きっかけはアナログマルチがLANケーブルに代わって簡単になる魅力から入りましたが、弊社での「CL5」導入を機に「Dante」の存在を知り、知識を重ねるうちにこれまでの1対1デジタル伝送との違いに気付いて「時代が変わる」予感を覚えたのです。そこでネットワークオーディオを知るために通常のIPといいますか一般的なネットワークを理解しなくては、と勉強を始めました。

PS　今回のネットワーク構築の概要を教えてください。

橋本　3箇所に拠点を設けておりまして、オーディオは「Dante」のプライマリとセカンダリ、そしてコントロールの3本を敷いています。「Dante」での接続は、「Nexo」と「EAW」でした。その他のシステムは、ステージ側にある「Rio3324-D」以降、アンプラックまではアナログもしくは「AES/EBU」接続となっています。

PS　図面によると光ファイバーも敷設されたようですが。

橋本　それについてはPC上でのソフトウエア制御信号に使っています。ご存知のとおり最近のスピーカーシステムはDSPでコントロールされますので9社分、VLANで切り分けたトランクポートを1本通しました。ただ各社さん制御信号のアプローチも様々ですので回線の用意だけはしておき、お使いになるかどうかはお任せといったスタイルでしたね。

PS　試聴会を終えてみての印象などいかがでしょうか。

橋本　現状においては規格が混在しています。自由に選べるといえばそうかも知れませんが、アナログ方式を含め例えばレベル管理といった点でも、すべてを同じように扱うにはまだ難しいなと。ただ「iPad」でのオペなど昔では考えられませんでしたし、1本のLANケーブルに多様な信号を載せることも今では可能です。昔から引き摺ってきた苦労というのか、諦めていた部分を飛び越えられる可能性をネットワークは秘めていると強く感じますね。

PS　貴重なお話、ありがとうございました。